



公開レクチャー&ディスカッション 第3回
実施報告書

認知症と生きる人たちと 紡ぐ音楽、音の会話

英国マンチェスター・カメラータの
事例から

2022年8月15日（月）

発行
東京都
公益財団法人東京都歴史文化財団
東京文化会館



東京文化会館 Music Program TOKYO Workshop Workshop! コンビビアル・プロジェクト
 社会包摂につながるアート活動のためのレクチャー&トレーニング

公開レクチャー&ディスカッション 第3回

認知症と生きる人たちと紡ぐ音楽、音の会話

—英国マンチェスター・カメラータの事例から

実施報告書

目次

| | |
|---|----|
| 1. 開催概要..... | 2 |
| 2. 東京文化会館 — 0歳から大人まで、あらゆる人が集える場所 | 4 |
| 3. コンビビアル・プロジェクト — 誰もが心豊かに暮らせる社会をめざして | 5 |
| 4. 音楽と認知症をめぐる..... | 6 |
| 5. 団体概要 マンチェスター・カメラータ Manchester Camerata | 7 |
| 1. 沿革と活動理念..... | 7 |
| 2. 地域における活動 Manchester in Community | 7 |
| 3. 行政、公共団体、研究機関との協働 | 8 |
| 6. 事業紹介 ミュージック・イン・マインド Music in Mind | 9 |
| 1. ミュージック・イン・マインドの概要 | 9 |
| 2. Music in Mind のアプローチ | 9 |
| 3. 効果 | 10 |
| 4. ミュージック・イン・マインド・リモート(Music in Mind Remote, 以下MiMR) | 10 |
| 7. ディスカッション | 11 |
| 8. ミュージック・イン・マインドに関する質問にお答えします | 18 |
| 9. 参加者概要..... | 24 |
| 10. アンケート結果 | 25 |

1. 開催概要

いまや認知症は身近な存在となりましたが、あなたは認知症に対してどのようなイメージをお持ちでしょうか。認知症になってからも、生活は続きます。認知症のある方々、そして家族や友人が、少しでも豊かに過ごすために音楽が有効であるという研究結果も出てくるようになりました。

この公開レクチャー&ディスカッションでは、英国マンチェスター・カメラータを迎え、世界各地で高く評価される認知症対応プログラム「Music in Mind」から学びました。

日程

2022年8月15日(月) 日本 18:00~20:30 英国 10:00~12:30

会場

オンライン(Zoom ウェビナー)

内容

近年、障害者芸術に関する法整備が進むなど、アートが持つ包摂性に着目した活動への関心や需要が高まっています。

東京文化会館では、多様性のある共生社会の実現にむけて、より質の高いアート活動を展開できる機運醸成と課題提起を目指し、公開レクチャー&ディスカッションを開催いたします。各テーマに精通した第一人者や当事者を迎え、この領域における現状や課題を整理しながら、文化関係者がどのように向き合うべきなのか、どうしたらより質の高い活動が実施できるのか、模索していきます。

今年は、英国で先駆的な取り組みを行う室内管弦楽団、マンチェスター・カメラータを迎えました。創設 50 周年を迎え、高齢者や認知症の方をはじめ、さまざまな社会的困難を抱える地域社会に深くコミットした活動は高く評価されています。

【内容】

- マンチェスター・カメラータと「Music in Mind」の概要
- 認知症と共に生きる人にとっての音楽とは
- 人を中心にするインタラクティブな音楽づくり
- 音楽で語りあうためのテクニック
- これまでをふりかえって(音楽家、介助者、認知症のある方々の声から) ほか

【登壇者】

リジー・ホスキン(マンチェスター・カメラータ コミュニティ部長)
 ヘレナ・ブル(マンチェスター・カメラータ シニア・プロジェクト・マネジャー)
 アミーナ・フサイン(マンチェスター・カメラータ首席フルート奏者／音楽療法士、
 Music in Mind 音楽家)
 ナオミ・アタートン(マンチェスター・カメラータ首席ホルン奏者／Music in Mind 音
 楽家)
 モデレーター: 柿塚拓真(神戸市民文化振興財団事業部演奏課 演奏担当課長)

【アクセシビリティ】

日英逐次通訳、手話通訳(日本語-日本手話言語)、日本語文字表示

定員・申込方法

| | |
|------|---|
| 定 員 | 70 名程度(事前申込制、先着順) ※予想を超える応募があったため、Zoom ウェビナーとして実施。 |
| 料 金 | 無料 |
| 申込期間 | 2022 年 6 月 23 日(木)～8 月 15 日(月) |
| 対 象 | 音楽関係者、アーティスト、自治体・文化行政関係者、教育・社会福 祉関係者、学生、研究者など |

制作: 東京文化会館 事業係 杉山幸代

主催: 東京都／公益財団法人東京都歴史文化財団 東京文化会館

協力: 豊中市市民ホール等指定管理者

助成: ブリティッシュ・カウンシル



文化庁文化芸術振興費補助金(劇場・音楽堂等機能強化推進事業)
 独立行政法人日本芸術文化振興会

2. 東京文化会館 — 0歳から大人まで、あらゆる人が集える場所

東京文化会館は、クラシック音楽、オペラ、バレエなど舞台芸術を上演する都立文化施設として、1961年に建築され、2021年に開館60周年を迎えました。日本のクラシック音楽やバレエの歴史において歴史が長いホールの一つです。

建物は、ル・コルビジエの弟子である前川國男が設計し、日本が誇るモダニズム建築として国内外で知られています。

東京文化会館では、東京都、また日本の文化政策に基づき、3つの柱による自主事業—「創造発信」「人材育成」「教育普及・社会包摂」—を展開しています。0歳から大人まで、あらゆるライフステージに寄り添える独自の音楽プログラムです。

3. コンビビアル・プロジェクト — 誰もが心豊かに暮らせる社会をめざして

東京文化会館では、2017年から社会包摂を意識した取組みをはじめ、2021年には「コンビビアル・プロジェクト」という、新しい事業を立ち上げました。このプロジェクトを通じて、人生100年時代をあらゆる人が心豊かに暮らせる共生社会の実現を目指しています。誰もがアートを通じて喜びや生きがいを等しく共有できるアート体験の提供、障害や社会的背景を超えて文化的創造・交流に関わることができるための環境整備にも取り組んでいます。

例えば、特別支援学校や社会福祉団体でのワークショップやコンサート、手話付きや英語版ワークショップを実施しています。国内外の先駆的事例から学ぶレクチャーやトレーニング、職員向けバリアフリー研修も取り組んでいます。

2020年に開始した「東京文化会館リラックス・パフォーマンス」も、コンビビアル・プロジェクトを象徴する取組みのひとつです。自閉症や発達障害などで静かに聴くことに不安がある方や、中途失聴や難聴の方も、ご家族やご友人と一緒に安心してコンサートを楽しめるように様々な工夫が凝らされています。

このほか、大学、NPO法人など多様な団体と連携・交流し、対話の場や検証も行っています。2020年には『社会包摂につながるアート活動のためのガイドブック』を刊行し、東京文化会館ウェブサイト上で日本語と英語で公開しています。

詳細は東京文化会館ウェブサイトをご参照ください。

<https://www.t-bunka.jp/about/onstage.html>



■コラム■ 「コンビビアル convivial」「コンビビアリティ conviviality」とは

20世紀哲学者イリイチが提唱した自立共生に関する概念。共に生き生きと生きる、「共愉」と訳されることもある。

イリイチは、企業、行政、医療、教育、輸送、通信、法など、私たちを取り巻く社会的制度を「道具」に見立てました。本来、ひとのために作られた道具が、いつの間にか独り歩きし、資本主義社会のなかで道具がひとを支配し、奴隷化しているのではないかとイリイチは問いました。だからこそ、組織や制度に頼らず、年齢や性別、社会的地位、地域、人種、障害やあらゆる社会的背景の枠を越えて、個人が他者と、自立的で創造的な交わりを持てる状態や環境が重要だと訴えたのです。

つまり、コンビビアル、コンビビアリティは、何かを何かで取り込もうとする「包摂 inclusion」とは、意味が異なるのです。

4. 音楽と認知症をめぐって

認知症は、世界中の様々な国で大きな社会課題となっています。しかし、認知症を発症しても人生は続きます。認知症になった方だけでなく、家族や周囲も、また認知症に向き合わなければなりません。

「ロンググッバイ」といわれるように、家族や周囲も、自分の愛する人や大切な人が、少しずつ知らない人になっていく悲しみやもどかしさを感じながら、長期化する介護期間を過ごしていきます。認知症の方も、家族も、周囲も、共により豊かに、自分らしく生きていくためにはどんなことができるのでしょうか。

■難しさを解消するための連携—アート、医療・社会福祉、中間支援、行政

近年、文化施設やアート団体によるアウトリーチや多様な音楽活動が盛んになりました。しかし、高齢者施設や社会福祉団体と活動をする際に、難しさを感じている方も多いのではないのでしょうか。

充実した活動を展開するためには、アート団体やアーティスト側も、臨床現場に入る前に、学ばべきことや知っておくべきことがあります。また、アート団体が他のセクター、例えば社会福祉・医療分野、中間支援団体、地域行政と連携することも重要です。

■認知症になっても「わたらしく」「あなたらしく」生きていくために

「認知症」がいかに社会的なテーマであるかは、ここで述べるまでもありません。異なるセクターの関係者が、よりよい活動を少しずつオファーしあうことで、認知症の方と家族や周囲を支えるための仕組みがはじめて可能になる、と誰もが気づき始めています。

アートで認知症を治すことはできません。しかし、認知症とともにご本人もご家族も、「わたらしく」「あなたらしく」より良く生活していくために、私たちは何ができるのでしょうか。アート団体は、何を社会にオファーできるのか。もっと大きい視点で「わたし」「あなた」を支えるために、それぞれの領域のスペシャリストたちは、どのように自分たちの専門領域を越えたら、横断的連携が可能になるのか。

これらの問いは、国や社会制度を越えて、私たち一人ひとりの<主体性>と<創造性>を呼び起こそうとしているのです。

5. 団体概要 マンチェスター・カメラータ Manchester Camerata

リジー・ホスキン Lizzie HOSIKIN (マンチェスター・カメラータ コミュニティ部長)

1. 沿革と活動理念

マンチェスター・カメラータ(以下、MC)は英国マンチェスター州を拠点に公益財団法人として運営される管弦楽団であり、2022年で設立60周年を迎えた。MCは、老若男女問わず全ての聴衆の声に耳を傾け、従来の管弦楽団とは異なった活動に挑戦し、音楽で変革を起こすことを目的としている。伝統的なコンサートホール公演のみならず、前例がないような空間や場での様々なプロジェクトなど、管弦楽の活動を広げている。例えば、モーツァルトなど名曲演奏以外にも、オペラやゴスペルを演奏することもある。他にも、1990年代のハウスミュージック演奏にはじまり、マンチェスターにある有名ナイトクラブ「ハシエンダ」とコラボした「ハシエンダ・クラシック」¹、70年代ロックバンド「ジョイ・ディビジョン」のベーシストとの共演もある。現在は、アフロ・ドイチェ²との協働プロジェクトも進行中である。映像作品シリーズ「Untold(語られざること)」³では、MC楽団員や指揮者、地域の認知症の人たちの声を取り上げられた。

MCは、2030年までにマンチェスター州に住む全ての認知症の方、そして若者が世界トップクラスの音楽づくりに参加する機会を提供することを目指している。MCの活動は、これまででも地方自治体や英国政府による報告書『Power of Music Report』⁴にも取り上げられるなど注目度も高い。今後さらに英国内、そして国際的なリーディングモデルとなることを目標とする。

2. 地域における活動 Manchester in Community

■子供、青少年

子供や青少年を対象にした活動は、学校や地域で実施され、活動を通じて参加者の行動や意識が変容していくことを大切にしている。例えば、音楽家たちは子供たちの声に耳を傾け、クラス内で役割を与え、子供たちが創造的なプロセスをリードできるよう支援する。あるとき、落ち着

¹ マンチェスター・カメラータ50周年と地元ナイトクラブ「ハシエンダ」40周年を記念したクラブイベント。マンチェスター・カメラータとハシエンダのリーダーであるDJグレアムパークがハウスミュージックを演奏。<https://www.youtube.com/watch?v=NTUumTrgZvE>

² 英国生まれで、ガーナ、ロシア、ドイツのルーツを持つマンチェスターを拠点に活躍するエレクトロ音楽アーティスト。

³ MCのコロナ禍における取組みのひとつ。MC楽団員や指揮者、地域活動に参加する人達による音楽に関するパーソナルなストーリーを題材にした映像作品シリーズ。<https://manchestercamerata.co.uk/performance/untold/>

⁴ 2022年に英国の任意団体UK Musicが発行した報告書。<https://www.ukmusic.org/wpcontent/uploads/2022/04/Power-of-Music-Report-Final-Pages.pdf>

きのない男子児童に指揮者の役割をお願いした。すると、日頃の学校生活でもうまくリーダーシップを発揮できるようになり、クラスメイトから一目おかれる存在になった。

■認知症一当事者、介助者

MC は認知症に関わる活動にも力を入れている。介護施設に入居する認知症の方が、MC による音楽ワークショップ「ミュージック・イン・マインド Music in Mind」に参加すると、不穏が落ち着き、リラックスできるという検証報告がある。言語的なコミュニケーションが難しくなる認知症において、声や言葉を必要としない音楽は非言語コミュニケーションツールとなるからである。MC の認知症対応プログラムのひとつ「ミュージック・カフェ Music Café」は、介護施設に入居していない認知症当事者やその介助者が対象だ。この取組みで報告されている様々な効果（エビデンス）のなかには、認知症当事者だけでなく、一緒に参加する介助者の変化も含まれている。MC は、コロナ禍以後現場で活躍する介助者を対象に、音楽を活用したトレーニングをはじめ、日々の介護の支援を続けている。

3. 行政、公共団体、研究機関との協働

活動開始 10 年目を迎える MC の認知症対応プログラムは、着実な活動成果をあげている。その活動は、毎年、英国政府や自治体はじめ様々な助成や補助金獲得によって成り立つ。認知症ケアにおける音楽の活用を推進する慈善団体「Music for Dementia」は、MC を自治体や政府につなぐ大きな役割を果たす。マンチェスター大学との連携も 10 年におよぶ。マンチェスター大学との効果検証や研究活動は、MC の活動の発展に寄与している。

6. 事業紹介 ミュージック・イン・マインド Music in Mind

ヘレナ・ブル Helena BULL (マンチェスター・カメラータ シニア・プロジェクト・マネージャー)

1. ミュージック・イン・マインドの概要

「Music in Mind ミュージック・イン・マインド」(以下、MiM)は、2011年にマンチェスター市が世界保健機関 WHO による「Age-friendly City エイジ・フレンドリー・シティ(高齢者に優しい都市)」に指定されたことをきっかけに始まった。マンチェスター大学との共同研究プロジェクトの一環として、音楽療法士でもあるジョン・グラハム博士、MC のニック・ボンセロ氏が考案した。当初は、地域の認知症当事者とその介助者を対象にしていたが、次第に入居型施設や支援施設・団体へと展開を広げる。

MiM は、MC 楽団員と音楽療法士によって実施される。参加者ひとりひとりが MiM への参加を通じて、地域社会に自分の居場所を見つけられるよう支援することもねらいのひとつだ。MiM には音楽療法士が参与するが、従来の音楽療法の臨床的なアプローチとは異なる。プロの音楽家のアプローチ-音楽で表現したり、人に何かを伝えること(コミュニケーション)のプロである音楽家のアプローチが加わり、参加する認知症当事者や介護士にとっても貴重な経験となる。

2. Music in Mind のアプローチ

MiMのセッションでは、回想法を用いるのではなく、即興的なアプローチで、音(音楽)による対話を重ねていく。認知症当事者が音楽的なコミュニケーションを通じて自己表現できる場が提供されている。

各セッションには、毎回 10~15 名が参加し、お互いの顔がみえるように円型に座る。はじめて楽器に触る人でも負担なく音楽づくりに参加してもらえるように、手で持てる打楽器類が使用される。そこには、MC の音楽家も参加者と対等な立場で参加する。

セッションは“ハローソング”からはじまり、“グッバイソング”で終わる。その間の音楽づくりは参加者自身がイニシアティブをとる。MiMに参加する音楽療法士は、自分たちの役割を「個々の糸を編み込んで一枚のタペストリーを紡いでいくようなもの」と表現する。参加者ひとりひとりのアイデアや貢献が、他のメンバーの音楽と共に編み込まれ、大きな芸術作品の大切な一部分となるからだ。普段、介護を受ける立場にいる人たちは、自己表現や自分で選択する機会が少ない。だが、MiM の場では参加者の主体性が重んじられる。またセッションでは、決められたゴールに向かうことを目標とするのではなく、皆で共に“いまこのとき”を過ごすこと「be in the moment」、その過程に重きが置かれる。

3. 効果

マンチェスター大学との共同研究では、MiM の効果を定量的に生理学的数値で示すのではなく、認知症と共に生きる人たちのライフストーリーから、社会的・心理的影響を明らかにすることに重点が置かれている。

たとえば、MiM の評価では、他者との関わり、MiM 以外での活動レベル、幸福感、創造性、音楽で自己表現することで得られる自信などが大切にされる。入居型施設の認知症当事者を対象とした 20 週のプログラムでは、4 週目で、他者との交流、自己表現、音楽に対する反応が増えた。7 週目で気分が安定し、より活発で明るい気分になるなど日常心理にも変化がみられ、プログラムに参加した当初よりも不安行動が減少した。10 週目以降になると、MiM セッションに参加した週のあいだにわたって、幸福感が持続し、よりリラックスできていた。また、MiM の参加者は他の活動にも積極的に参加するようになったり、日常生活でも音楽に触れる機会が増える傾向がある。さらに、MiM 活動日から約 4 日間にわたり良好な精神状態が維持されると報告されている。

4. ミュージック・イン・マインド・リモート(Music in Mind Remote, 以下 MiMR)

2020 年の新型コロナウイルスの世界的蔓延を機に、MiM は更なる転機を迎える。英国研究・イノベーション機構 UK Research and Innovation の助成のもと、MC はマンチェスター大学のイノベーションチームとオンラインのトレーニングプログラム「ミュージック・イン・マインド Music in Mind Remote」(以下 MiMR)を開発した。

コロナ禍が猛威を振るう中、イギリスや各国の介護福祉、社会福祉の現場で働く職員の苦労は見過ごされることが多かった。望むような支援が届かずに、孤立感を感じる介護士たちも多かった。そこで、MC は MiM のオンライン版を開発し、福祉現場への文化的活動の支援を継続できるようにした。MiMR は、コロナ禍の介護士の学びになっただけではなく、同じ立場にある介護士たちと知り合い、サポートネットワークを築く機会にもなった。MiMR により、長期間、外部者との交流が寸断されている施設入居者の認知症の人たちとの 1 対 1 の音楽セッションを再開できた介護士もいた。さらに、MiMR の実施は、コロナ禍に活動が制限された音楽家への経済支援にもつながった。

7. ディスカッション

登壇者

リジー・ホスキン(マンチェスター・カメラータ コミュニティ部長)

ヘレナ・ブル(マンチェスター・カメラータ シニア・プロジェクト・マネジャー)

アミーナ・フサイン(マンチェスター・カメラータ首席フルート奏者／音楽療法士、Music in Mind 音楽家)

ナオミ・アタートン(マンチェスター・カメラータ首席ホルン奏者／Music in Mind 音楽家)

モデレーター

柿塚拓真(神戸市民文化振興財団事業部演奏課 演奏担当課長)

柿塚:

ミュージック・イン・マインド Music in Mind (以下、MiM)は、即興的な要素が強く、参加者からアイデアを集めて歌を作るなど、従来のオーケストラの音楽活動とは異なるスキルが必要であるように思う。楽団として音楽家にトレーニングは行っているのか。実施しているのであれば、どのような内容か。また、楽団員はどのような動機でこのプロジェクトに参加しているのか。

ヘレナ:

MiM を立ち上げる際に楽団員を、つまり音楽家をいかにサポートしていくか、例えば準備やトレーニング面でかなりの時間を割いて検討した。特に、この活動に参加する音楽家の動機を知ることが楽団としても非常に重要で、結果的に普通の楽団活動では知りえないような音楽家の可能性や技術を見出す機会にもつながった。

まず、音楽家たちは MiM を高齢者施設等で活動開始する前にトレーニングを受ける。例えば、認知症専門家から認知症の人たちとの接し方などについて。何週も関わっていると参加者と感情的な絆や繋がりが生まれ、音楽家が心理的負担を感じるようになる場合もある。だからこそ、音楽家をメンタル面でサポートできるよう、私やリジー、他スタッフはオープン・ドア・ポリシー、すなわち困ったことがあればいつでも相談できるような体制を整えている。また、音楽家をメンタル面でサポートするための人材も育成している。

音楽家も MiM 参加動機、また音楽家や音楽療法士がどのように実践しているのかに関しては、アミーナやナオミからぜひお話しいただきたい。

最近の評価報告によると、MiMで音楽家が果たしている役割は、聴くこと、(参加者の変化や行動、周囲の変化に)気づくこと、ファシリテートすること、ハーモニーやメロディで場を深めること、(参加者が参加しやすいように)支援すること、など音楽的なサポート以外にも、身体的支援なども多く含まれていることがわかった。MiMの活動を持続的なものにし、音楽家をサポートしながら彼らの充足感を高めるためにも、彼らの現場での役割も考慮する必要がある。

ナオミ:

私が参加しようと思ったきっかけは、私の父も認知症で、音楽が大きな力になっていたから。認知症の影響で落ち込んだり動揺したりたときに、音楽のCDを聴かせると、父は落ち着きを取り戻していた。私自身はホルン奏者で、演奏することはもちろん好きだが、音楽を人と共有することからも多くを学んでいると感じている。舞台上で何千人もの観客相手に演奏する、学校で教えるといった仕事と同じように、MiMが一番大切な仕事と感じている。

アミーナ:

私はナオミと違い、高齢者とのワークショップ経験も、特定の疾病の方と接する機会もなかった。私の兄弟のひとり、重度障害があって言語障害もある。私が音楽の道に進んだのも、彼の存在が影響している。病気や色々な課題を抱えた人たちと、臨床的に音楽的な環境で接する機会に関心があったこと、声を持たない人の自己表現にとっても興味があったこと、それらがMiMへの参加動機かもしれない。

MiMは、実践家として従来のコンサート活動とは異なる体験と捉えている。私たち音楽家は、あくまでも参加者の経験をサポートするファシリテーターで、大切なのは参加者。場やそこで生まれる音楽へのインフルエンサーは彼らだ。この関係性に大きな価値がある。

ヘレナ:

アミーナは、音楽家でありながらも、MiMには音楽療法士として参与している。ナオミは音楽療法士と共に協働する音楽家として関わっている。MiMの活動における自分の役割について聞かせてほしい。

アミーナ:

私はMC首席フルート奏者だが、音楽療法士でもある。MiMの活動における私の役割は、参加者、家族、介護士、音楽家、空間にいるすべての人たちのファシリテートすること。音楽家と私は、常に耳を澄ませ、目を凝らし、自分一人では気づかないことを協力しながら補完しあう。セッション中は有機的に起こる出来事を見逃さないように、オープンでいること、良く聴くことを心掛けている。セッション終了後に、事務局チームや音楽家仲間で記録映像を見ながら振り返ったり、トレーニングを通じてスキルアップするなど、日々研鑽している。

ナオミ:

10~20 週におよぶ場合は、前回での学びを次の回に生かしている。例えば、打楽器を楽しんでいる参加者には次回も同じ打楽器を手渡す。そうすると、参加者がより楽しんで自己表現できるようになることがある。

音楽家としての自分の役割は、音楽療法士をサポートすることだが、アミーナが言うように互いの協力が大切だ。アミーナと私は役割分担をしながら、セッション中もアイコンタクトしあったり、その時に起こっていることを確認しながら助け合う。

オーケストラ楽器の素晴らしさは豊かな音色と響きだと思う。例えば、私の楽器(ホルン)は、男性の声に似た深い共鳴音を出すことができる。それまで静かに参加していた人が、私の音に反応して突然歌いだしたり、踊りだすこともある。ヴァイオリンの演奏を見て、ヴァイオリンを弾くような動きをする参加者もいる。セッションでは、毎回このような多様な反応がたくさん生まれる。

柿塚:

現在、MC には何人の楽団員がいて、そのうち何人が MiM に参加しているのか。1 回のセッションに音楽家は何人ぐらい参加するのか。

ヘレナ:

MC には 33 名の団員が所属している。そのうち、約 65%が地域での音楽活動に参加していて、そのなかの約 35%が MiM に何らかの形で携わっている。

年によって助成金や外部資金獲得額が異なるため、実施回数や参加できる音楽家の数も変わる。現在 7 つの MiM プロジェクトが進行中で、全てに音楽療法士と音楽家の両方が関わっている。今年度は、あと 4 つが加わる予定。

柿塚:

これまでの発表や発言を振り返ると、イギリスだから資金含め様々な余裕があると思われがちですが、実は一つ一つのプロジェクトに助成金や外部資金の獲得、第三者評価によるエビデンスと社会的価値の明言化など、地道な活動を続けていってこそ、今があるという強い主張を感じた。MC の活動について話を進めるうえで、2 つほど私からお伝えしたい。

一つは、2010 年から WHO 世界保健機関が始めたエイジ・フレンドリー・シティ Age-Friendly Cities プログラム。マンチェスターは当初から参加し、高齢者に優しい町づくりを介護・福祉・医療以外の分野、例えば交通機関、住居、社会参加も含めて都市デザインする政策だ。日本でも秋田市や宝塚市、神奈川県下の幾つかの自治体なども参加している。これらの特徴は、自治体が政策イニシアティブは取るが、自治体とパートナーシップを組んだそれぞれの専門の分野、専門組織・機関・企業が、実際の活動を資金調達も含めて協働的に進めていくことにある。当然文化芸術もあり、マンチェスター市の場合は博物館、美術館、劇場、そしてこのマンチェスター・カメラータなどが、市政策の中で活動していることになる。

もう一つは「社会的処方 ソーシャル・プリスクライビング Social prescribing」だろう。英国には国民保険サービス National Health Service(以下、NHS)が母体になり、かかりつけ医が医学的処方に加えて、患者を地域の活動やサポート団体につなげる社会的処方という仕組みがある。日本でも実施に向けた検討や議論はされている。身体的な健康だけでなく、地域との繋がりを処方することでウェルビーイングを高め、認知症を含めた医療や社会課題の緩和につなげようという試みだ。

これらの点を踏まえて、資金や運営の仕組みについて詳しく伺いたい。MC は様々な助成を得ながら運営していると聞いたが、外部資金を含めどのように運営しているのか。

ヘレナ:

安定的な外部資金の獲得のためには、MiM が投資価値のある内容であることを主張するアドボカシー活動が重要になる。

世界保健機関 WHO が 2010 年に策定したエイジ・フレンドリー・シティ Age-Friendly Cities に、マンチェスター市が英国で初めて認定され、マンチェスター市でも関連政策が打ち出された。以来、マンチェスター市は市民の声を政策に反映しながら、今に至る。

MC も当初からこの政策に関与しており、関連イベントでプログラムの効果を発表した。我々もエイジ・フレンドリー・カルチュラル・グループ Age-Friendly Cultural Group の一員として、政治家、議員、政策決定者たちに MiM の説明やアドボカシーを行う機会がある。ありがたいことに、マンチェスター市は高齢者を巻き込んだ活動も盛んで、高齢者と共創する団体も数多く存在する。

リジー:

社会的処方は、MC のような公益財団法人にとって、良い面もあれば難しい面もある。例えば、かかりつけ医から処方を受けて、我々の認知症対応プログラムに参加する認知症家族の方はたくさんいるが、我々は国民保険サービスから助成を得ているわけではない。市民に無料で活動の場を提供したいが、資金確保はいつも課題になる。英国内の助成の多くは対象活動期間が短く、持続的な活動のための資金集めには、相当の努力が必要である。長期的な資金確保のために、マンチェスター地域の自治体や音楽団体、国民保険サービスと協働して、活動成果の発信に努めている。各地域の事務所を拠点に自治体と協働しながら、活動範囲を広げることに取り組んでいる。

アミーナ:

MC 主催ではないが、私が関与しているある活動では、高齢者約 85 名が参加している。多くの方は社会的処方経由で参加している。認知症に特化したグループではないが、コロナの 2 年半前から活動している。コロナ禍を経て、高齢者には孤立している人が大勢いるということがわかった。中には、うつや不安、その他の症状が発症しても、なんらかの理由で医師診療を受けら

れない人たちもいる。4～5人のリンクワーカー⁵と連絡を取りながら、5つの保健センターで実践している。そこでは、非薬物的療法が必要な人達を対象に、ガーデニング、音楽、料理、ランニング、サイクリングなどの6週間プログラムが組まれ、患者が社会とのつながりを取り戻すきっかけとなっている。社会的処方⁵の利点は、個人が社会とのつながりを保つことで、医療制度に依存せずとも自宅で自立した生活を続けられるように、個々の回復力(レジリエンス)を育むことに重点を置いているところにある。私自身が地域での音楽療法実践に感じている可能性も同様で、社会的処方のような予防的対応は英国では顕著な対策と言える。

MiMの強みのひとつに、ケアホーム等入居施設に加え、地域内でも実践していることがあげられる。社会的処方は、リジーの指摘のとおり、まだ発展段階にあり課題もある。だが、芸術などの創造的活動の価値を理解してくれる人たちにアプローチしながら、持続可能な実践を推進していくことが大切だ。

柿塚:

MiMに参加されている高齢者、家族そして介護者への影響はどのようなものがあるのか。

ヘレナ:

ある参加者は、視覚障害によって多くのフラストレーションを抱えていた。音楽は文字など視覚情報を必要としないが故、他者が何を伝え表現しようとしているかを理解しやすい。彼女はMiM参加を通して、幸福感やウェルビーイングを高め、グループの中に自分の居場所を見つけることができているように思う。また、音楽がコミュニケーション手段になれば、言語能力に関わらず、誰も排除されない場ができる。音楽を共通言語に互いに助け合うような様子も見られた。音楽が人と人を結びつけ、一体感を生み出すのだ。

リジー:

音楽家の一部スキルを介助者や介護士たちに提供することも大事だ。英国では、入居施設で働く介護士の立場は管理者に比べて弱く、決定権がない。音楽を介した活動が、臨床でも日常的介護でもない方法論として機能すれば、介護士が入居者を支援するための新しい可能性が生まれるのではないかと。

ヘレナ:

介助者や介護士は、MiMを通じて、投薬以外のクリエイティブな方法を見つけることができる。音楽活動を通じて患者の今まで知らなかった面を知るなど、患者との新しい関係構築にもつながる。なによりも、認知症の方々にとって、新しいことを経験し、学び続けられる機会も大切である。

⁵ 社会的処方に関わる職種のひとつ。医師やケアマネージャーなどの専門職と連携し、患者に適した地域活動への橋渡しをする。

ナオミ:

介護士をトレーニングする際は、各々が働く施設の実態に即して実施できるように指導する。音楽的な自信を持ってもらうことも欠かせない。介護士は入居者のことや彼らのニーズを理解しているため、私たちも彼らから多くを学んでいる。ある介護士はトレーニング後に、入居者のための活動プログラムを全て担当するようになった。

アミーナ:

MiM 実践においてオーケストラ楽団員と音楽療法士が協働するのと同じように、私たちは介護士や介助者、参加するすべての人たちと協働関係にある。我々音楽家は、介護士から参加者に関する多くの情報や役に立つヒントを得ている。介護士は我々音楽家が、参加者に先入観なく接する様子から気づくこともある。音楽活動による介入が、人間関係のダイナミクスを変容させ、認知症の人たちが日常的に抱える生きづらさや困難に良い影響を与える。MiM への活動参加が、参加者の行動変容につながることもあるが、必ずしも何かを改善したり変えることが目的ではない。あくまでも、音楽を介して、普段の生活では聞こえてこない当事者の声や貢献に耳を傾ける。そのような自然な流れが私たちの活動の要であり、その影響は非常に広範囲で、波及効果も高いと感じている。

ヘレナ:

もう一度強調しておくが、私たちが大切にしているのはゴールではなく過程(プロセス)だということだ。

柿塚:

音楽療法士との協働について尋ねたい。音楽療法士は療法として音楽をする、音楽家は音楽として音楽をするのであれば、実践上、多少の矛盾や対立が生まれる可能性も孕む。その辺りは音楽家としてどのように考えているか。

リジー:

クラシック音楽の世界では、音楽は聴衆に向けて演奏するという固定観念があるように思う。だからこそ、まず音楽家には MiM は「公演」ではないこと、音楽家はファシリテーターだということを理解してもらう必要がある。認知症の人たちがリーダーであり主役であるということ、これをまず音楽家に伝えなくてはいけない。

アミーナ:

音楽療法実践とコミュニティ音楽実践の観点から、MiMの現場で対立の可能性があるかという

問いと理解している。MiMではパーソン・センタード⁶、そして音楽中心アプローチ⁷を用いている。どちらも個人を主体に音楽で支援するアプローチのため、対立の心配はないように思う。療法ではなくコミュニティ音楽実践をしている団体も多くあるが、素晴らしい仕事をしている。私はクラシック音楽家として音楽を学び、今もコンサート活動を続けている。MiMの活動と出会って、音楽療法士になったが、音楽家としての経験も含め、これまでの経験やインスピレーション、想いなどすべてがこの活動に生かされているように思う。

ナオミ:

私はこの活動を始める時に、誰かに向かって演奏するのではなく、共に演奏するというアプローチを学ばなければいけなかった。それまでは、記譜された音楽を奏でることに慣れていたため、即興演奏にも抵抗があった。今はより自由に即興することも楽しめるようになったし、共感力も高まっているように思う。音楽家として舞台上で演奏していても、観客に共感できるようになったと感じる。MiMでは音楽療法士の存在が支えとなり、自分の音楽家としての専門性を生かすこともできている。音楽療法士のための目となり耳となりサポートすることで、MiMの活動に一貫性を与えることもできるようになった手応えもある。いうならば、音楽療法士が私の能力を引き出してくれているような感覚で、この場でありがとうと伝えたい。

柿塚:

本日のディスカッションを私なりに整理してみると、次の4点になると思う。

まずひとつめは、MiMは即興的なアプローチだからこそ、プロセスに重点をおいていること。MiMの実践では、既存の音楽作品を演奏することも、ファシリテーターが具体的に言葉で指示をすることもない。ある一定期間、例えば3カ月というプロジェクト期間で、はじめの数週間は何が起きているのか理解するのが難しいかもしれないし、効果が現われるのにも時間がかかる。だからこそゴールではなく、その過程(プロセス)や携わる人の相互作用が重要になってくる。参加者の声、表現、選択を尊重しながら、音楽を共有できる即興的なアプローチになる。

次に、MiMが音楽家と音楽療法士の両方の資質を引き出しあっているということ。認知症の人たちやその家族、介助者だけでなく、音楽家にとっても常に学びがある充実したプログラムで、すべての関係者にメリットがあることが理解できる。

3つめは、MiMのような地域や社会に密接した活動実施には、自治体のサポートや他のセクターとの協働、パートナーシップが必要不可欠であること。

最後は、コロナ禍でもオンラインツールを活用してMiMのエッセンスを介護士と共有し、社会福祉現場への支援を継続したように、その時々に合わせて、現場やプロセスを重視し、常に最善の方法を模索しながら、プログラムを推進しているということ。

⁶ パーソン・センタード・アプローチとは、目の前にいる個人をかけがえないの存在として畏敬をこめて向き合う臨床心理アプローチ。

⁷ 音楽中心アプローチとは、個人の音楽経験や個人から生まれる音楽を最も大切としたアプローチを意味する。

8. ミュージック・イン・マインドに関する質問にお答えします

YOUR MUSIC IN MIND QUESTIONS ANSWERED!

2022年8月15日のライブ配信中にお答えできなかった17の質問に、マンチェスター・カメラータのメンバーが回答くださいました。

[AH] -アミーナ・フサイン(マンチェスター・カメラータ首席フルート奏者/音楽療法士、Music in Mind 音楽家)

[LH] -リジー・ホスキン(マンチェスター・カメラータ コミュニティ部長)

[NA] - ナオミ・アタートン(マンチェスター・カメラータ首席ホルン奏者/Music in Mind 音楽家)

【1】 高齢者から音楽的にシンプルな要素しか出てこない場合、あるいは自発的な演奏が生まれない場合、音楽家はそれを奨励するのですか？もしそうなら、どのようにするのでしょうか？

[AH] 音楽的にシンプルな要素こそ、私たちがグループで音楽的な対話を始めるのに必要だと感じる。音楽家として、まず音楽を構築するための出発点(手がかり)を私たちは探す。しかし、完全な静寂から始まることは非常に稀だ。認知症の段階によって、参加する方法も異なる。また、誰もが楽器を演奏したい、あるいはできるわけではないことを覚えておく必要がある。音楽家が演奏して音楽を提供することは簡単だが、その音楽は参加者が生み出す音や動きをサポートするものでなければならず、演奏家の音楽が場を支配するようであってはならない。

[NA] 最初に参加者から反応がない場合でも、音楽家がさりげなく演奏を始めてみれば、高齢者(参加者)もつられて参加するようになることもある。全員と一緒に音楽づくりに参加できる状況になったら、音楽家は高齢者が自分の音(声)を聞きとれるように、音楽の質感を変えていくとよい。音楽家は音楽をリードするのではなく、自分の役割を変えながら、サポート役に回るようにするのだ。

【2】 シンプルな打楽器は子供っぽい、つまり子供扱いされていると感じて、参加したが高齢者もいらっしゃいますか？その場合、どのように対応なさっていますか？

[LH] ひとつの音楽において、正しいも間違いもないはず。もし、自分には合わないと思う人がいたら、それはそれでよい。普段は介護者、認知症の方、音楽家、家族など、全員が輪になって活動をしている。そうすると、少し消極的な方でも次第に参加するようになったり、その場でじっと見いたりするようになったり変化がみえる。

[AH] ベルやエッグシェイカーのきれいな色は、特に男性にとっては子供っぽいものに映るか

もしれない。本当に大切なのは、その楽器の背後にある音楽的な意図だろう。もし、「子供っぽい」楽器で童謡を演奏したら、参加するのをためらう人がいるのは理解できる。しかし、その場で生まれでてくる即興音楽に忠実であれば(真の意味で参加者の音楽に反応していれば)、どのような楽器であろうと、音をうまく配置して、文脈を変えられるだろう。つまり、いかに音楽づくり体験に全体性(誠実さ)をもたらせるか、は音楽家次第なのだ。私たちは、ここでも信頼を築こうとしているといえる。

【3】セッションの際に、高齢者自身が楽器を選んでいるのでしょうか？それとも、音楽家がその人にあつた適切な楽器を渡すのですか？

[LH] 可能であれば(移動に問題がない限り)、高齢者が自分で自分の楽器を選ぶようにしている。そうでない場合は、介護者に楽器を選んでもらい、どの楽器がもっと楽しく演奏できるかを参加者と一緒に探してもらっている。

[AH] 可能なかぎり、ご自身で楽器を選んでいただく。楽器の見ただ目で選んでしまって、実際に演奏してみると意外と難しくて最初でつまづいてしまう、という方もときどきいらっしゃる。だからこそ、参加者が自分で選んだ楽器とどのように関わっているのかを観察することは重要になる。そして、難しそうな場面で、音楽家がサポートしていくことも大切だ。例えば、ある人がより高度な認知処理を必要とするドラムとばちを選んだ場合、両手で別々のことをするのは難しいと感じて、イライラしてしまうかもしれない。そのような場合は、役割を分担するとよい。音楽家がドラムを持てば、参加者は「ばち」という一つの要素に集中できるようになる。

私たち音楽家は、参加者の自主的な選択をサポートするために何ができるかを考えて、常に行動するようにしている。もし、ある楽器が喜びよりも動揺を与えていることが明らかであれば、同じような魅力があつて、より簡単にできる他の楽器は何かを考えている。そのように慣らしていけば、しばらくして最初に選んだ楽器に戻ってこられるかもしれない。

【4】グループセッションで多くの音が同時になっていると、混乱してしまう方もいらっしゃると思います。そのような場合、どのように対処していますか？

[LH] 確かに多くの音が同時に出てしまう。しかし、音楽家と音楽療法士のチームの役割は、グループを観察し、観察技術を使って皆を音でまとめていくことにある。いわば、フリージャズのようなもので、最後にはアンサンブルになる。

[AH] そのとおり。だからこそ、音楽家たちが、参加者がつくりだす音に意味を持たせていくことが大切になる。そのために、音楽家は参加者の音を聴きながら、その音世界をよりよくするために、さまざまな要素を織り交ぜて、ある種のフローを作り上げるようにしている。

【5】参加者には認知機能、体力、聴覚能力が異なる高齢者がいらっしゃると思います。それぞれをどのような考慮/対応をしていますか？

[LH] Music in Mind の検証報告(HKD Research, 2019)で、Music in Mind のセッションに参加した認知症の人たちに一貫した影響と結果が示された。

- 他の住民との社会的交流の増加(100%)
- Music in Mind のセッション以外での活動レベルの向上(77%)。
- より大きな幸福感 (100%)
- 音楽的な交流が増え、音楽で自分を表現する自信がついた(88%)。

[AH] Music in Mind は、完全に包括的(インクルーシブ)なアプローチだ。音楽そのものが、複数の役割や層を内包している、と捉えている。人間も同じだろう。音楽家たちは、その人ができることに焦点を当て、その人の音楽的な役割に意味を持たせていく。同時に音楽家は適切なベース配分を心掛ける。例えば、活発な音楽づくりのなかで、音楽的なコントラストと気を抜かれる場所の設定。適切な静寂(サイレンス)、音楽的な明瞭さと起きていることを消化するための適切な間合い、より自然体でいることを感じるための空間、など。

[6] 高齢者同士の音楽的な交流はどの程度あるのでしょうか。

[AH] どの程度かは答えようがないのだが、人と人との交流はたくさんある。

[NA] 時として、高齢者同士の交流が多いこともあり。逆に、ほとんどない場合もある。もともと社交的でない人もいますし、認知症で他人のことを意識するのが難しくなっている人もいる。プログラムを通して、参加者が過去にとらわれることなく「今」この瞬間に音楽を作り、周囲や他の人たちを意識できるようになっていただければと期待している。

[7] 高齢者と一緒に即興演奏をするときに、何か守るべきサインやルールがあるのでしょうか？

[AH] 「ルール」は、高齢者がグループの中で重要な存在であり、いつも最も大きな“声”を持っていて、音楽作りにおいて次に何が起こるかを常に決定していくということ。即興演奏の中で、私たち音楽家がどう反応すべきかを形作り、その内容に影響を与えるのは彼らなのだから。

[NA] 忘れてはならないのは、高齢者のために演奏するのではなく、彼らの音楽をサポートし、彼らと共に演奏することだ。高齢者がどのように演奏したいかを考える時間を持てるように、スペースを空けておくと、彼ら自身が自らの声を感じることができるようになる。

[8] プログラムの平均的な実施基本設定を教えてください。実施したプログラムの数(頻度)、1プログラムあたりのセッション数、期間、参加者の数、音楽家の数、介助者の数など。

[LH] ケアホームでの Music in Mind セッションの場合、通常、最低でも週1回15~20週間(つまり1プログラムあたり15~20回のセッション)、1回あたり約60~90分のセッションを実施している。一般的には、10~15人の入居者・参加者のグループで、Music in Mindの基本を学んだ音楽療法士と音楽家が1名ずつ参加することを推奨する。また、ケアホームの介護士にも最低1~2名参加する。これは、介護の義務としてだけでなく、セッションの運営方法や、音楽即興と「会話」がケアホームの日常生活でどのように役立つかを知ってもらい、スキルを身につけてもらうためだ(先に述べたメリットと同様)。

【9】 プログラム実施のための予算確保は誰(どこ)が担うのですか。音楽家の報酬、楽器、その他の準備費用は誰が負担するのですか？可能であれば、音楽家の報酬はいくらか教えていただけますか？

[LH] 通常は、マンチェスター・カメラータのコミュニティ部長である私の役割になる。マンチェスター・カメラータは英国のチャリティ団体なので、6か月実施するミュージック・カフェの実施経費を捻出するために、私が各助成財団や地方自治体の助成に申請して、資金調達を行っている。ここでいう経費とは、会場の使用料、飲み物、曲作りのための材料(注:文具など)、打楽器、音楽療法士の報酬、音楽家の報酬、作曲・編曲家の報酬、そして事務局(プロジェクトマネージャー)の人件費と運営経費が含まれる。音楽家への支払額は、マンチェスター・カメラータと音楽家ユニオンとの契約に基づいて行われる。報酬には、ワークショップの企画費、ワークショップの出演料、交通費、楽器の運搬費も含まれる。

【10】 高齢者が住んでいる施設に行く活動だと思えますが、「自宅」に住む高齢者のためのプログラムもあるのでしょうか？その場合、社会的処方適用されるケースはあるのでしょうか？Music Caféは、在宅の人向けのプログラムなのでしょうか。

[LH] Music Caféは一般向け、特にご自身の家で生活されている方と介護者の方向けの活動で、入場無料で開催している。Music Caféは、Music in Mindと同じ原則で運営されていますが、ご家族や在宅介護者の方にも参加していただけるよう、曲作りの要素を取り入れている。また、同じような状況にある方同士がつながり、社会的交流の機会がない方々の孤独感を軽減するという社会的な目的も持つ。地域のリンクワーカーや医師(社会的処方)から紹介された人たちや、認知症の活動グループも数人参加している。

【11】 プロジェクトを検証する際、検証方法や検証内容は出資者とともに決定するのでしょうか。

[LH] 資金提供者のガイドラインに沿うが、我々が重視しているのは、実際のプロジェクトそのものに即した方法や内容であることだ。

【12】 プロジェクト評価に関する枠組みや内容は、プロジェクト開始時から現在まで変わっていないのでしょうか？

[AH] はい。プロジェクトごとの成果や学習に応じて、継続的に見直し、修正している。

【13】 このプログラムは、高齢者だけでなく、音楽家にも変化をもたらしているように思います。実際にそのような変化はあるのでしょうか？

[AH] Music in Mindに参加したことで、音楽家としてより成長できたと感じている。音楽の仕組みをより深く理解し、即興演奏ができるようになり、より多くの楽器を演奏できるようにな

り、作曲技術をより理解し、人間性をより理解し、認知症の病態についてもより深く理解できるようになった。このプログラムのおかげで音楽療法士になることができたと思っている。かなり多くの変化があった。

【NA】 私は個人的な経験についてしか話せないが、高齢者と接するとき以外でも、例えばオーケストラで演奏するとき、室内楽を演奏するときにも、多くのことを MiM で学ばせてもらっていると感じている。認知症に関する知識も格段に増えた。多くの人に出会い、その人の人生について少しでも学ぶことができたのは、とても幸運なことだと思っている。おかげで、私自身とても充実しているし、自信にもつながり、ウェルビーイング(幸福感)にもつながっていると感じる。即興演奏にも自信が持てるようになった。聞き上手にもなった。そして、仲間の音楽家たちが音楽にどのような貢献をしているのか、よりよく感じ取れるようになった。

【14】 オーケストラメンバーは「カメラータ・イン・コミュニティ」をどのように受け止めているのか？オーケストラのメンバーにとって、この活動はどのような意味を持つのでしょうか？

【AH】 このプロジェクトに参加する音楽家は、この仕事をとても気に入っているように見える。私自身は、音楽にこれまでとはまったく異なる、より創造的な方法で携われる機会、と捉えている。さまざまな音楽活動に参加することは、プロフェッショナルとして成長するために非常に重要だと思う。

【NA】 よく質問されるが、携わっていることを素晴らしいと思っているようだ。

【15】 このプログラムに参加するオーケストラのメンバーは、自分の意思で参加するのですか？

【LH】 すべて自由意志で、オーケストラのメンバーにも定期的にトレーニングに参加する機会が設けられている。

【AH】 はい！

【16】 アミーナさんは、プロの音楽療法士の資格を取得されたそうですね。音楽療法を学ぶ前後では、Music in Mind へのアプローチや思いは変わりましたか？

【AH】 興味深い質問だ。私が音楽療法士になった理由は、特に Music in Mind のプログラムに影響されたからだ。(他の音楽家の中にも、同じような理由で受講を検討した人がいるが、当然ながら、それはとても大きな決断だ！)

音楽療法の訓練を受けてから、Music in Mind に対する私の思いはさらに強くなっている。それは、このプログラムが常に人と音楽を軸にした誠実さを持ち、コミュニティのニーズを満たしたり、洗練させたり、発展可能性を秘めた前向きなプログラムであると、より確信できたから。

【17】 マンチェスターで実際に行われている Music in Mind のプログラムの映像があれば見てみたいです。どのような音なのでしょう。高齢者とどのように関わり、音が高齢者にど

のように作用するのを見てみたいです。

[LH] マンチェスター・カメラータのコミュニティプログラムに関する最新情報は HP からどうぞ！

<https://manchestercamerata.co.uk/community/music-in-mind/>

動画も多数掲載している。

・Music Café（認知症の人たちが作った音楽を収録した動画）

<https://manchestercamerata.co.uk/music-cafe-at-the-monastery/>

・参加者インタビュー：キース Keith

https://drive.google.com/file/d/14beveM44dPVbjLX3JB89_apcx7yPpCRC/view

・短編映画シリーズ「Untold」紹介ページ

（上述のキースが認知症の診断と経験を一人称で語った映像含む）

<https://manchestercamerata.co.uk/performance/untold/>

9. 参加者概要

事前申込数 409名

のべ参加者数 507名

参加者背景

<専門とするアート分野、好きなアート分野>

| | |
|---------------------------|-----|
| クラシック音楽(現代音楽、オペラ含む) | 37% |
| その他の音楽(ポップス、ジャズなど) | 19% |
| 美術全般(コンテンポラリーアート含む) | 16% |
| バレエ、ダンス、舞踊(コンテンポラリーダンス含む) | 6% |
| 演劇 | 6% |
| 伝統芸能、民俗芸能 | 6% |
| 建築・写真・映像 | 3% |
| 文学 | 1% |
| その他 | 6% |

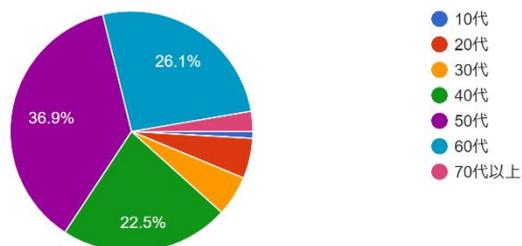
<所属>

| | |
|---------------------------|-----|
| 学生、教育・研究機関(音大講師等含む) | 19% |
| 音楽家、アーティスト、ワークショップ・リーダーなど | 18% |
| フリーランス、自営業 | 12% |
| 保健医療機関、ヘルスケア分野 | 9% |
| 社会福祉法人・社会支援団体 | 8% |
| 劇場・音楽堂、コンサートホール | 6% |
| その他芸術団体 | 5% |
| 美術館・博物館 | 4% |
| オーケストラ等演奏家団体 | 2% |
| 自治体、官公庁、政府機関 | 2% |
| その他 | 15% |

10. アンケート結果

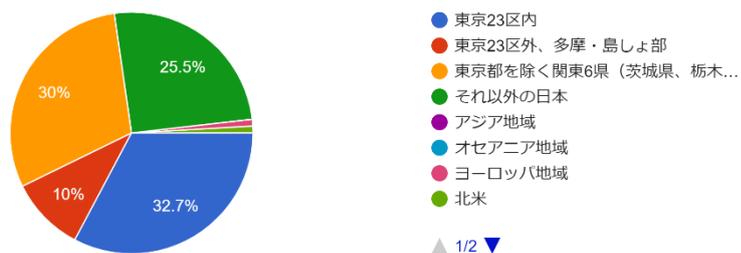
[Q1] ご年齢を教えてください。

111件の回答



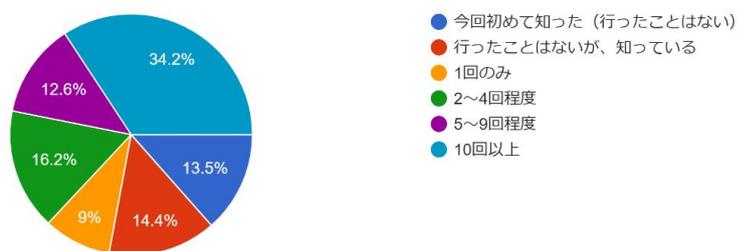
[Q2] 参加地域を教えてください。

110件の回答

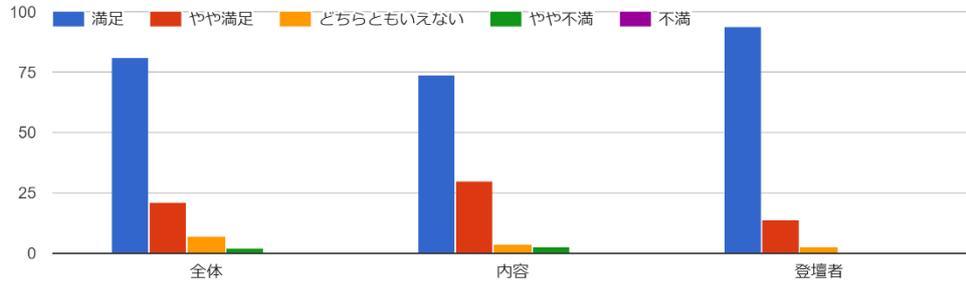


[Q3] 今までに東京文化会館(上野駅公園口前)にいらしたことはありますか？

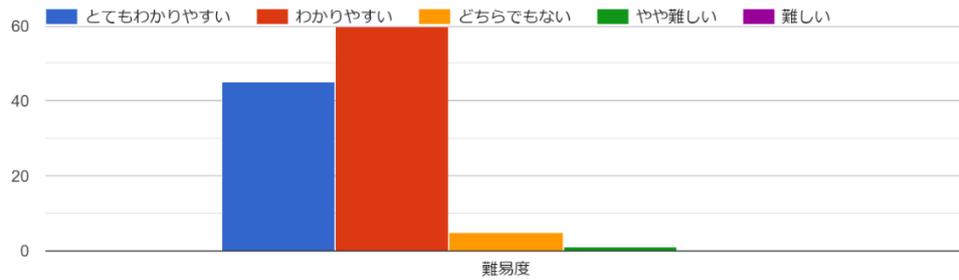
111件の回答



[Q4] 本日は満足いただけましたか？

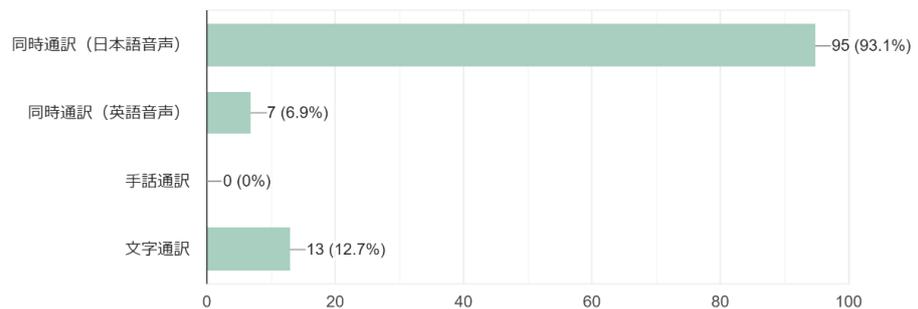


[Q5-1] 本日の内容はわかりやすかったですか？



[Q5-2] 本日の情報保障で、実際に使用したものを教えてください。（複数回答可）

102件の回答



東京文化会館 Music Program TOKYO
Workshop Workshop! コンビビアル・プロジェクト
社会包摂につながるアート活動のためのレクチャー&トレーニング

公開レクチャー&ディスカッション 第3回
「認知症と生きる人たちと紡ぐ音楽、音の会話—英国マンチェスター・カメラータの事例から」
実施報告書

発行 東京都／公益財団法人東京都歴史文化財団 東京文化会館
作成 東京文化会館 事業係
編集・翻訳 杉山幸代(東京文化会館)
編集・構成 原真理子(5, 6, 7)

2023年1月発行

©Tokyo Bunka Kaikan. All rights reserved 無断転用・転載を禁止いたします。